

## Ⅱ 小学部の実践

### 「部朝の会」での取り組み

#### 1. はじめに

養護学校の義務制施行以来 他校同様に本校でも児童・生徒の障害の重度化・多様化が一層目立ってきており自閉傾向の強い子どもや四肢に軽い緊張などが見られる子どもも入学してくるようになった。これに対応するため 本校では「子どもの成長にはその子の障害が重ければ重いほど多くの人々とのかかわりが必要」との観点で 昭和54年度から60年度まで集団学習の研究を行ない小学部では「部全体の朝の会」（以後「部朝の会」と記す）における研究実践に取り組んだ。そのときの「集団学習」の研究から ダイナミックな集団活動により集団の力を借りてルールを学び自分の役割が分かることを通して 子ども自身が落ち着いて個々の力を伸ばしていくことが明らかにされた。また 技能・態度の習得や訓練的学習だけでなく 集団の楽しいムードの中での情感への働きかけが 子どもの情緒を豊かにして一人一人を伸ばすきっかけになることも分かってきた。そこで 今年度の研究テーマである「豊かな心と生活」をうけて 単に情緒の安定を図り社会性を身につけることをねらうだけでなく もっと個々の内面を充実させ 物事を感じ取る心や自発的に行動していく力なども身につけさせたいと考え 研究を進めていくことにした。

#### (1) 「豊かな心と生活」についての基本的考え方

小学部ではそれぞれのクラスにおいて 子どもたちの学習や行動における能力差が顕著であり 1クラスに文字が書け 足し算ができる子から言葉がなく多動で着席行動がまったくとれない子までいる場合がある。一学期は新しい担任と学級にまだ慣れないこともあってクラス全体がまとまりにくいこともあるが 二学期になるとみんな生活の見通しがもてるようになり 落ち着いて学習できるようになったり先生や友達とのコミュニケーションがとれるようになったりして学校での生活を楽んでいる様子が見られるようになる。それはやはり 毎日リズムのある生活を送って日常生活動作を身につけ生活経験を広げることで情緒も安定し気持ちに余裕がでてくるからだと思われるが こうしたことがまず「豊かな心と生活」の基本になると考えられる。つまり日々私達が行なっている学級経営の中での授業や休み時間でのかかわりは 子どもたちが健康的で充実した生活を送れるようになるための大切な基盤として大変重要な役割を果たしているといえよう。

しかし 全体的に見れば嬉々として生活している子どもたちも一人一人をよく観察してみれば まだまだ日常生活の技能・知識や人とのかかわりなどにおいて未熟な面が見られたり 毎日パターン化した遊びを続けて遊びの範囲が広がらなかつたり 集団の中での学習態度が十分身につけていなかったりすることが多い。今 さらに「豊かな心」を持った

子ども「豊かな生活」ができる子どもを育成したいという背景には このようにまだまだ補い培っていかねばならないことをたくさん抱えているという現状がある。

子どもたちの「豊かな心と生活」について一言で表わすのは難しいが ここで次の三つの視点を考えることによってそのとらえ方を整理しておきたい。

#### ① 「進んで学習活動に取り組む子」

様々な活動に対して意欲的に取り組むことによって日常生活動作の習熟や知識・技能の習得など基本的な力をつけることができる。こうした態度を身につけることによって集中力や行動力も養われ さらに自立した生活へとつなげることができるようにしたい。

#### ② 「みんなと心を開いて共感できる子」

多くの人とかかわることで事柄の理解を深めたり行動を広げたりするだけでなく「楽しいね!」と表情で表したり一緒にあって喜び合ったりできるようになる。人に対してやさしい気持ちで接することを学ばせ 豊かな感性を持った子に育てたい。

#### ③ 「自ら考え工夫できる子」

知的障害のある子に考える場を与えることは大変重要であり 考えることによって理解力も高まり自分で判断したり選択したりする力も身についてくる。自分らしさを発揮しながら年齢や発達に応じて生活を楽しみ工夫していく姿勢を持たせたい。

以上のように 「豊かな心と生活」に関して目指す「子ども像」を設定することによってより子どもの様子がイメージしやすくなり指導の手だてを考え 評価をする段階で役に立つことと思う。また これらの事柄があるひとつの授業場面でなく その他の学校生活の場面でも見られるようになれば その子どもの生活は豊かさに迫ることができたと評価できるであろう。子どもたちがより充実した力を身につけ それが生活の中でより多く活かされるよう願っている。

### (2)「部朝の会」の活動を通して

三つの視点から小学部の子どもたちの「豊かな心と生活」について考えてみたが こうした力が一朝一夕に養われるものではなく ある一つの手だてや方法だけで子どもすべてが変わるものでもない。一人一人を見てもその心と生活の中身は千差万別であり 個人個人にとっての豊かさというものもそれぞれ異なっている。よって やはりそこには一人一人を見据えたねらいがあり 十分練られた教材研究と意図的に組織づけられた学習計画が必要となってくる。さらに 教師側の細かな工夫や指導の手だてによって授業全体の雰囲気盛り上がり学習集団である子ども同士のかかわりがより増えることで どの子どもも生き生きと自らの力を発揮することができると思われる。

そのためには いわゆる机に向かい 椅子に座っての学習から離れて 視覚・聴覚・触覚などの五感を十分働かせ「自分もやってみたい」と子どもたち自身が能動的に活動するような授業を創造していくことが大切であると考えられる。つまり 広い空間の中で子ど

もの興味を引くダイナミックな活動を展開して楽しく体を動かしたり 美しい造形作品やうっとりする音楽などを見たり聴いたりできるように 様々な視点で題材を用意することが必要となってくる。さらに集団の中で子ども同士が互いに影響し合い 子どもと教師との関係がより密接なものになることも今後の授業に望まれるのである。

このようなことを踏まえ 学部のすべての子どもと教師による集団活動を今後も重視するという共通理解のもとに 「豊かな心と生活」を目指す取り組みを「部朝の会」において行なっていくということが確認された。(河 合 利 秋)

## 2. 研究の方法

### (1) 「部朝の会」の進め方

昨年度までは 週2回の部朝の会を リズム活動の日とゲーム活動の日に分けて行っており 教師もリズム担当の者とゲーム担当の者に分かれていた。今年度は研究を進めていく上で共通理解が図りやすいよう 小学部全教師で「部朝の会」の全時間を担当することにした。これは 教師全員が組織的・計画的に研究を進め 授業に取り組むためである。内容も リズム ゲームの他に新たに造形的活動を取り入れ この三つを相互に関連づけながら活動を展開していく形式に変えた。また子どもたちの興味を引きつけ活発な活動を展開するために効果的なチームティーチングを行なうこととした。

教師は メイン指導者(3名) サブ指導者(3名) 記録者(3名)に分かれ 単元ごとにローテーションすることにした。それぞれの役割は 以下に示す通りである。

メイン指導者…事前に活動内容を立案 計画し 部研究会で提案する。そこで教師全員で活動内容を検討 確認した後 当日の準備 進行までを担当する。

サブ指導者……メイン指導者の意図をくみながらも児童と同じ立場に立って授業に参加し 児童の手本となると同時に活動を盛り上げる。

記録者……VTR撮影 および編集 保存を担当する。VTR撮影にあたっては授業全体の流れがわかるように かつ 対象児の表情が読み取れるように留意し 必要に応じて1~3台のカメラで撮影する。

### (2) 研究会の持ち方

部研究会は 原則として週1回開かれる。そこでは 研究テーマに関する討論 「部朝の会」の活動内容の検討を行ない VTRによって子どもの活動の様子を分析した。

研究テーマに関する討論では 小学部の児童にとっての「豊かな心と生活」をどう捉えていくかについて話し合い どんな子どもに育てたいか そのためにどんな指導をしていくべきかについて考えてきた。

「部朝の会」の活動内容の検討については 前述の通りメイン指導者が中心となって行なった。

VTRによる分析は 年度初めに選んだ対象児6名に焦点を当てて行なった。本来ならば小学部全員の児童一人一人について見ていくべきであるが それは実際のところ非常に困難であるので 対象児としていろいろな年齢 能力 障害の児童を選ぶようにした。分析にあたっては 対象児のことばや動き 表情などから 一人一人に設定した個人目標にどれだけ迫ることができたかを評価の観点とした。 (堀井和子)

### 3. 実践

#### (1) 活動のねらい

##### ① 学級集団の中では学べない人間関係を学ぶ

「部朝の会」は 学級集団よりもさらに大きな集団である小学部全体で行なわれている。これは 1年生から6年生まで年齢も能力も様々な児童の集団である。この中で 上級生や下級生 ほかの学級の教師など 学級集団にはない子ども同士 子どもと大人の人間関係を体験することができる。子どもにとって豊かな人とのかかわりを持つことは 大切である。

##### ② 一緒にゲームをしたり歌を歌ったりする活動そのものを楽しむ

集団全員で 一緒にゲームをしたり 歌を歌ったりするなどの活動そのものを十分に楽しむ あるいは ほかの子どもの活動している様子を見て 「自分もしたい」という意欲を起こし 真似たり工夫したりしていくうちに徐々に個人個人の独創的な動きを引き出すことができる。このことは子どもの内面を高めることにつながるのではないかと考える。そして これらのことによって遊びが広がり 子ども自身がより楽しめるようになれば 「豊かな生活」に一步近づくことになるのではないだろうか。

##### ③ 季節とのかかわり 自然のもの 本物との出会いのなかに 豊かさを感じる

季節を題材として取り上げたが 季節は身近なものでありながら 季節感というものは子どもたちにとって非常にイメージしにくいものであろう。しかしながら それぞれの季節においてひとつの色 ひとつのテーマ ひとつの物語などに絞って繰り返すことにより 子ども自身がそれらを認識する力が育ちやすいようにした。また その季節ならではの行事や自然のもの 本物を取り入れて より興味関心を引き 具体化することも重要なポイントのひとつである。 (西村麻里)

#### (2) 指導にあたって

本校小学部の児童数は1年生3名 2年生4名 3年生3名 4年生4名 5年生3名 6年生3名の計20名である。男女の内訳は男子14名 女子6名である。主な障害はダウン症 自閉的傾向 一般的な精神発達遅滞などである。

今年度は「豊かな心と生活をめざして」というテーマのもと 季節を感じることも「豊かな心と生活」につながると考えて「部朝の会」の展開の柱に「季節のイメージ」をとり

入れることにした。季節感を前面に押し出したことが今年度の「部朝の会」の特徴といえる。

そのための活動内容を検討した結果 音楽的活動 ゲーム的活動 造形的活動の三分野にわたってとりあげ 季節のイメージを色で感じとれるようにした。

教材の選定にあたり留意したことをいくつか挙げておく。

『今までの活動を継承 発展させたもの』

歌や手遊び 季節の行事の事前学習など今まで行なってきた活動を取り入れつつ新たに造形的活動を加えた。

『20人の子どもと10人の教師で作る最も良い活動内容の模索』

教材を選定するにあたり子どもの興味や関心のあることがらを観察してそのような教材を取り入れる。

『「季節のイメージを感じとる」ための手だて』

季節のイメージを色に求めた。

春－緑（木々の若葉）	単元「みどりがいっぱい」
夏－青（空 海）	単元「ようこそ 龍宮城へ」
秋－紫（ぶどう さつまいも）	単元「おいしい秋見つけた」
冬－赤（クリスマス）	単元「もうすぐクリスマス」
冬－白（雪）	単元「冬のファンタジー」
春－桃（ひなまつり）	単元「はるよこい」

それぞれの色を題材にして活動内容を検討していくことにした。

また 「季節のイメージを感じとる」ための方法として遠足や散歩などの校外学習がある。それらは その都度 部の行事や学級単位で行い 「部朝の会」の学習と絡めて季節感を感じるための重要な機会と捉えている。

指導にあたっては 子どもの心の奥深くにあるものをゆさぶり とことん一つの雰囲気の中に浸らせるためには ゲームだけ リズムだけ 造形だけとばらばらに学習するよりある一定のテーマのもとに それらを合わせて子どもに与えたほうがより強いインパクトがあり学習効果もあがるのではないかと考えている。つまり何週間かの期間ごとにそれぞれテーマを設け それに関する歌やものづくりやごっこ遊びなどを継続して行なっていくこととした。

さらにテーマによってはストーリー性をもたせ「わくわくする気持ち」や「ドキドキする気持ち」などを起こさせると共に 主体的に参加したり興味を持って集中して取り組んだりできるように指導方法を工夫していきたい。

それぞれの活動の指導観は以下のとおりである。

## ① 音楽的活動について

### 『子どもたちの好む季節や行事の歌』

音楽の時間だけでなく毎日の学校生活で あるいは家で家族と共に歌えるものを選曲する。また 歌うことと合わせて歌にまつわる話をすることによって 身近な社会生活に対する関心をもたせていく。

### 『みんなと一緒に動くことの楽しさを味わう』

手をつないで歩くとか 肩につながって歩くなどから始め 簡単な動きの繰り返しでも楽しく 美しく表現できることを体験させたい。

### 『身体表現をする』

バルーンやひも 棒 ろうそくなど 曲想に合わせて手に持つものをかえて身体表現を行う。物を持つことは自分の体の動きを意識しやすく より大きな動きを誘うことができたり 逆に慎重に静かな動きができたりする。また その物の動きから曲の雰囲気を一層感じとることができる。

### 『子どもが考えだした動きを大切にする』

これらの活動では 基本になるようなこと（集団でつながる 物を持つなど）は決めるが その中で子どもが考えだした動きを大切にし みんなのものに拡げていくように配慮する。

指導にあたっては 教師が率先してそれぞれの活動を楽しみ 子どもがその雰囲気に浸りながら 音楽の楽しさを共感していくような場づくりを心がけたい。

## ② ゲーム的活動について

### 『ルールが簡単でわかりやすい』

多人数で行い しかも限られた時間の中でゲームを行うためにはルールの理解にあまり時間のかからないものがよい。

### 『結果が視覚的にとらえやすい』

結果が目に見えることで勝ち負けや正誤の判断がつきやすくなる。ゲームをしている本人だけでなく まわりでみている子どもにとってもゲームの進行がよくわかる。

### 『多人数でとりくめるもの』

小学部20名の集団が一つの活動に取り組むためには時間的 空間的な余裕が必要である。それと同時に 教師が児童の把握をしやすいものが求められる。

また わかる子どもだけがする 参加するのではなくどの子も活動できる場を設定していきたい。時には教師の援助も必要と考える。また 順番に活動していくことにより「次は自分」という期待や意欲が生まれる。

指導にあたっては 子どもによって得意なこと 不得意なことがあるのでいろいろな内容のものを取り入れたい。同じゲームを何回か繰り返すことによりルールがわかったり

技能が向上したりして前回よりも意欲的に取り組めることがあるのである程度の回数を重ねることも大切であるとする。

### ③ 造形的活動について

『作り方が簡単であること』

児童全員が一斉に参加する活動であるので一人でできるところはなるべく一人でさせて成就感や次への意欲を持たせたい。

『児童の能力に応じた作品が作れること』

染物やいもぼんなど偶然性の要素が強い活動を設定することにより どの子も活動に参加しやすく できあがりの楽しさを各自が期待することができる。また活動に見通しをもてる子にとっては自分なりのデザインや構図の工夫など創造力を盛り込むことができる。

『共同制作ならではのスケールの大きい作品』

一人一人がそれぞれ一つのもので作り そして全員の分をよせ集めて一つの作品にすることでスケールの大きい作品になり 驚きや感動が味わえる。

『色を使う活動を取り入れる』

今年度の方針である季節のイメージを色で表わすためと 色を媒介とした活動を好む児童が多いことから 色ぬり 染色などを毎回の活動に取り入れる。

主な活動としては工作 絵画 染色等を考えている。素材としては加工のしやすさを考えて紙 ダンボール 布等を準備する。また 技能的なこととしては 塗る 染める 切る ちぎる 押すなどを考えている。

以上三つの分野の活動において 今年度のねらいである季節のイメージを考慮した活動内容を考えていきたい。

(新保利久)

### (3) 各活動の実践

みどりがいっぱい 5月～6月

桜が散り 木々の緑がまぶしく感じられる季節がやってくる。一年のうちで最も過ごしやすく さわやかな季節である。どの子も外に出た時には新緑のすがすがしさを感じるに違いない。さわやかな空気は肌で感じることができ 木々の美しさはいやでも目に飛び込んでくる。この季節を色でたとえるならば やはり若々しい緑のイメージだろう。

「部朝の会」の時間に学習したことが 外に出かけて緑を見たときに こういうことだったのかなと理解できるようになることを願って 「みどりいろ」にこだわって活動を考えていくことにした。テーマは自然の「緑」であることを念頭に置きながらも 最初は色そのものを子どもたちに投げかけ 少しずつ本質にせまっていきたいと考えた。

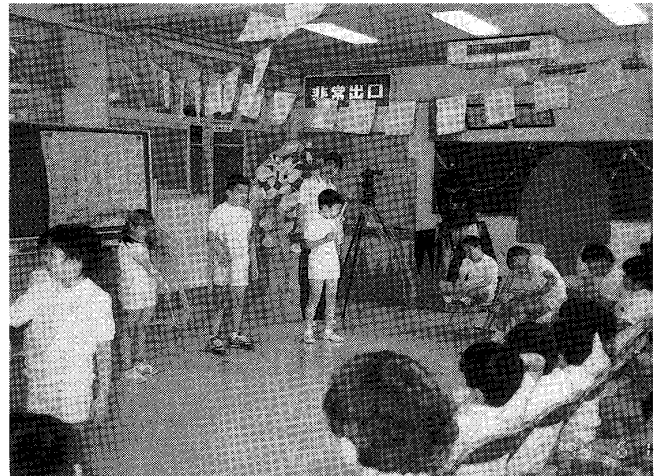
## 活動計画

うた・リズム	ゲーム	造形・その他
<ul style="list-style-type: none"> <li>・はるのまきば 歌に合わせて バトンを振りながら踊る</li> <li>・ふうせんフワフワ 曲に合わせて緑色の風船をとばす</li> <li>・みどりのかぜ 曲に合わせて緑色の大きな布を揺らす</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シルエットクイズ 「みどりのものなあんだ？」 OHPでスクリーンに映した緑色の物が何かを当てる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・草で遊ぼう 本物の草で遊ぶ</li> <li>・みどりをつくろう 緑の色水を作る</li> <li>・みどりで染めよう 和紙を緑色に染める</li> <li>・木と草づくり 木や草の形のダンボールを緑色にする</li> </ul>

### 活動のねらいと子どもの様子

#### ・はるのまきば

この曲は春らしい軽快な曲で 題名や歌詞からも広がる緑の風景が浮かんでくる。リズムにのって楽しく体を動かすことができるように バトンを振りながら歌うことにした。バトンの先端に1mぐらいの緑色のひらテープを何本かつけておき 子どもの腕の動きが大きく見えるようにした。曲に合わせて好きな動かし方をしてもよいことにしてバトンを与えたところ 腕を前後または左右に振る子は多かったが 全体的には思いきって体を動かすことができないように見えた。バトンに気を取られて大きな動きが少なかったことや どのように動かせばよいのかよくわからなかったからであろう。



♪かぜがふくまきばを～

そこで 教師一人一人がそれぞれ違う動きをして見せたり 子どもたちの中から出てきたおもしろい動きを紹介したりすると 自分もまねてみようとする子が出てきた。自分で振り方を工夫できる子は少なかったが 雰囲気によってバトンを動かす様子が見られた。

#### ・ふうせんフワフワ

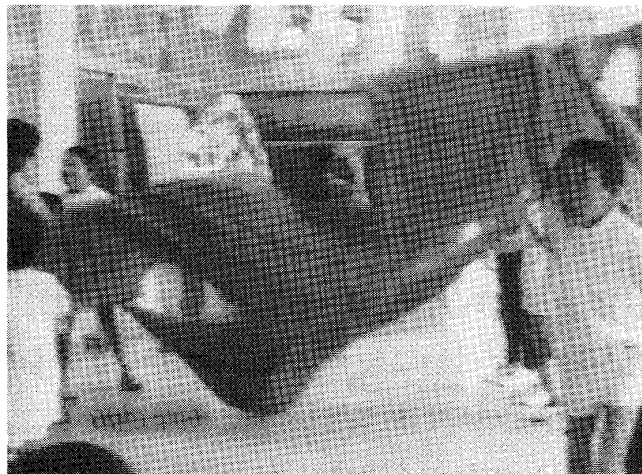
ゆったりした曲を聴きながら緑の風船を打ち上げ その動きを目で追うことで視線が上がり 高い木を見上げたときのような感覚が再現できればと考えて風船を取り上げた。

子どもたちは風船を扱うこと自体を楽しんでいたが 曲の雰囲気を感じ取る余裕まではなかったように思う。



・みどりのかぜ

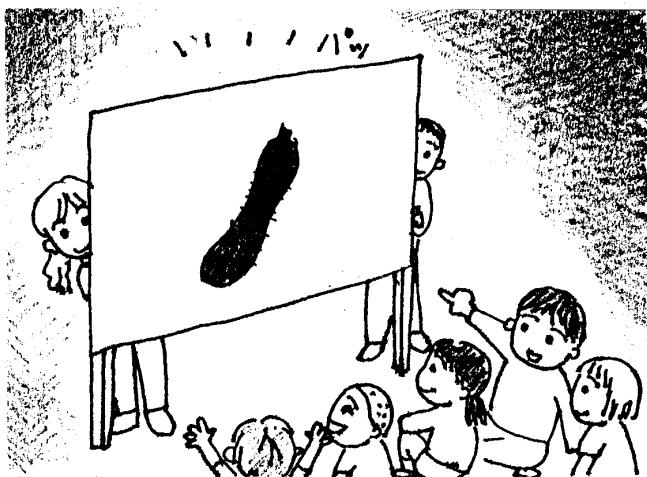
風船が難しいようなので 緑の布を使って 風を表現してみてもどうかと考えた。軽くて 揺らすと空気を含んで膨らむ素材の布を用意し 両端には子どもが持ちやすいように丸い筒を巻きつけておいた。ゆったりした曲に合わせて布を上下に大きく動かすと周囲の空気が揺れ 風が起こり 子どもたちの顔をなでる。それだけでも 布の動きがおもしろく 子どもたちは喜んで布を揺らしていた。



みどりのかぜがふいたよ

さらに 新緑の季節にも少しずつ移り変わりがあることから ①ゆったりした曲 ②春らしいイメージの三拍子の曲 ③初夏のイメージの元気な曲 以上3曲を順番に流すことにし それぞれの曲にふさわしい布の揺らし方を子どもたち自身が工夫できるようにした。子どもたちも曲の雰囲気の違いに気づいたようで 布の動かし方に変化が見られた。①では上下に大きく ②は三拍子なので体も布も左右に ③では弾むように細かく揺らす動きが合っているようである。布を通して自分の動きを相手に伝えたり 相手の動きを感じ取ったりしながら 一枚の布でさまざまな風を表現することができた。

・シルエットクイズ「みどりのものなあんだ？」



みどりのものなあんだ？

緑色にこだわった部朝の会で 緑のシルエットクイズを試みた理由は 野菜や果物など形に特徴のある緑色のものが数多いからである。また 身近な緑色の道具——例えば緑のはさみやペン えんぴつけずり コップなども出題することにした。

「みどりのものなあんだ？」という問いかけとともに形が映し出されると 一瞬ではあるが ほとんどの子が注目していた。わかる子は口々に名前を言う。そして「正解は…」

の合図で実物が現われる瞬間も 子どもたちの視線がしっかり集まるのである。言葉がなく あてっこすることには参加できない子も 映っていたものが「一体何かな？」と思いながら見ているからだろう。さらに「このピーマンの色は…？」という質問にみんなで声をそろえて「みどりー！」と合言葉のように繰り返すことで 出題されたものがすべて緑色であることに気づかせるようにした。スクリーンに映る形のおもしろさや言葉遊びも楽

しみながら 正しい答えが増えていったように思う。

#### ・草で遊ぼう

草の緑色やにおい 感触などを味わってほしいと考え 本物の草をホールに持ってきて自由に遊んでみることにした。

草に触ることに抵抗のある子はおらず それほど積極的でない子も 見本で示したように 草や葉っぱをちぎったり 紙にこすりつけたり 木づちでつぶしたりして 草に触れる様子が見られた。また バケツの中で草と水を混ぜて足で踏んでいる子や水に葉っぱを浮かべて食べ物に見たてる子 茎の部分を振り回している子 そのまま口に入れてしまう子もいた。草で遊ぶという素朴な経験は 本物の緑に触れる大切な機会であった。

#### ・みどりをつくろう

青色と黄色を混ぜると緑色ができることを知ってほしいと考えた。導入では 色そのものを擬人化したストーリーの絵本「あおくんときいろちゃん」の読み聞かせを行ない あおくん（青い色水）ときいろちゃん（黄いろい色水）を用意した。

絵本と同じ「あおくんときいろちゃんはとってもなかよし」というフレーズで青と黄の色水を混ぜ合わせる。色水がみるみる緑色に変化する様子はとても鮮やかでわかりやすく 子どもたちにとっても興味深いようだった。

#### ・みどりで染めよう

子どもが扱いやすい大きさに和紙を切っておき その子に応じてくしゃくしゃに丸めたり 好きな形に折り曲げたりして色水に浸して染めた。和紙全体を浸すとたっぷり水を吸うので 軽く絞ってから紙を破らないように慎重に広げ 新聞紙の上で乾かす。和紙の一部分だけを浸しても 丸め方や折り方によって形や模様ができるので 広げるときにどんなふうになっているかなという楽しみがある。一人が数枚染めて たくさんの緑の紙ができあがった。

#### ・木と草づくり

ダンボールを木の形に切ったものを3つ用意し 緑色にする方法は以下のようにした。

- ①びりびりチーム…緑の紙をびりびり破って のりで貼る
- ②ちょきちょきチーム…緑の紙をはさみで葉っぱの形に切って のりで貼る
- ③ぽんぽんチーム…タンポに絵の具をつけて たたいて着色する

各自が好きなチームへ行って木を作った。形はすべて同じ三本の木であるが それぞれに違った雰囲気の木に仕上がった。②のチームは はさみを使ったのでやはり一番時間がかかり 早くできた①と③のチームが同じ方法で草も作った。

小学部のホールは 窓に緑のセロファンを貼ったり 子どもたちが染めた緑の万国旗木や草で緑いっぱいになり まるで森の中のような雰囲気になった。また「部朝の会」のある日は教師もみんな緑色の洋服を着てくるなど緑の環境づくりに努めた。その中で 改

めて「はるのまきば」を歌ったり シルエットクイズをしたり みどりのかぜの活動を行  
なったりした。 (山 野 道 代)

ようこそ龍宮城へ 6-7月

6・7月を象徴する色として「青」を選んだ。これは梅雨の雨水、梅雨明け後の青空  
そして子どもたちが待望しているプール 海をイメージしている。

個々の子どもの指導目標と「青」という色彩から連想される事象を考え合わせてそれぞ  
れの分野ごとの活動を設定した。さらに これらの活動が単発的なものでなくより関連性  
をもったものとなるよう考慮した。その結果それぞれの活動をひとつの話の中で展開して  
いくという方法をとることにした。そしてそのベースとなる話に「うらしまたろう」を選  
び これをもとに授業を構成していくようにした。ただし 表題にあるように「うらしま  
たろう」ではなく龍宮城を重視することにした。これは「うらしま」のストーリーよりも  
龍宮城やその周辺の持つ青のイメージを強調したかったためである。

今年は梅雨が短く 青空のもと何度も水泳教室を行なうことができた。このためこれら  
の色彩のイメージがより身近なものとして受け止められたと考える。

活動計画

うた・リズム	ゲ ー ム	造形・その他
<ul style="list-style-type: none"> <li>・あめふりくまのこ パネルシアターと手遊び</li> <li>・波をつくろう 波の音に合わせて青色の ビニールを動かす</li> <li>・うみ 歌唱</li> <li>・魚のおどり 曲に合った魚の動きを感 じ取っておどる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さかなつりゲーム 鉄板を貼った画用紙の魚 を磁石をつけたつりざお でつる</li> <li>・波をくぐろう フロアカーにのり波の下 をくぐる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うらしまたろう ペープサートを見てあら すじを知る</li> <li>・さかなをつくろう 新聞紙をまるめて紙袋に 入れ魚を作る</li> </ul>

活動のねらいと子どもの様子

・あめふりくまのこ うみ

今回用いられた曲は6月「あめふりくまのこ」7月「うみ」である。

これらは何度か子どもたちに指導されている馴染みの深い曲であるが季節を象徴するの  
に適した曲であると考えて選んだ。「あめふりくまのこ」は昨年度パネルシアターと手遊  
びを用いた指導がなされており多くの子どもたちがそれらの内容を覚えている。その子ら  
につられて新1年生や昨年度あまり活動出来なかった子どもが他の子らの活動を模倣する

ことができた。

#### ・うらしまたろう（ペープサート）

今回の実践の導入としてベースとなる「うらしまたろう」のあらすじを子どもたちに知らせたいと考えた。このとき子どもたち全員がわかりやすいようにペープサートを作成して演じた。また子どもたちの興味を引くためいくつかの小道具を用意した。この活動はあくまでも導入でありこれだけで子どもたちがうらしまたろうの話のあらすじをつかむことができたとは思えない。しかし目の前を横切るカメのペープサートや玉手箱からのドライアイス煙などにはよく集中して見ており今後の活動に期待をもたせることができたと思う。事実この後一連の活動を経て11月の表現会には劇「ようこそ龍宮城」へと発展させ成功をおさめた。導入時の興味付けがこの成功の重要な要因となったと考える。

#### ・魚をつくろう

ここでは様々な模様の紙袋に裂いた新聞紙を入れて魚の尾の部分テープでとめ目やひれを貼るといった活動を行なった。ここでは全員が同じものを作りこれを組み合わせて大きな作品を作りあげるという成就感を得ることにねらいをおいた。

活動の過程においては活動内容に興味を持たない子活動を終えて手持ち無沙汰になった子らもいたが完成したさかなを青いひらテープに全部吊した様は壮観であった。ここで作られた作品はこの後ホールの窓に青セロファンを貼り海中に見立てたときの装飾にしたり波くぐりゲームのゴールさらには表現会の大道具として利用した。

作品をただ作るのではなく様々な場面で利用することによって自分の作品が活かされているという喜びを感じさせることも大切であろう。

#### ・波をつくろう・くぐろう



波をくぐって龍宮城へいこう

せて動くということにねらいをおいている。最初は思いのまま力まかせに動かしていた子もやがては相手に合わせた動きができるようになった。

波をくぐろうの活動ではフロアカーをあやつってゴールである龍宮城へ移動するとい

3 m程度の青みがかった透明ビニールの両端を持ち波の音のCDにあわせてこれを上下に振り波を作る。また前述したように龍宮城（うらしまたろう）を中心に展開するのでカメに模したフロアカーでこの波をくぐるといった活動を付け加えた。

波おこしのタイミングはなかなか難しく相手の動きに合わせて上下させなければならない。この活動によって自分だけで行動するのではなく他の子の動きを見てこれに合わ

うねらいがあったが ビニールの感触や波によって起こされる空気の動きを好み フロアカーで潜ったままその感触を楽しむ子どもが続出した。

これらの活動は交代で行なったが いずれも積極的に取り組み 普段あまり活動しない子どもが根気よく波おこしに取り組む姿が見られた。ただ 波のビニールが大きく 波おこし役の子どもがあまりフロアカーの子どもに注意を払えなかったきらいがあり 今後より広く他者を意識することができるよう留意することが必要と思われた。

#### ・魚のおどり

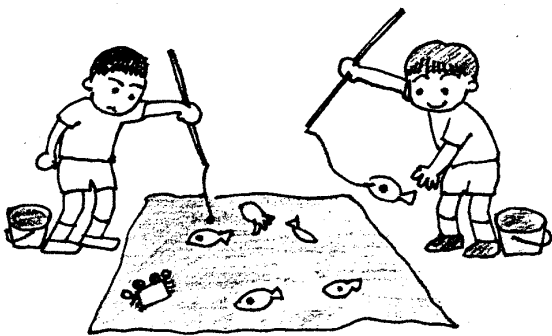
魚の群れのイメージした「スケーターズワルツ」とびうおをイメージした「ピアニスト（動物の謝肉祭）」カニをイメージした「サンドペーパーバレエ」等の曲に合わせて思い思いの振りをつけて踊る という活動である。

魚の動きに関しては 最初の時間に教師が一度踊って見せたが あとは子どもたちの思うままにまかせた。4・5月にバトンによる身体表現を経験しているが 今回は短時間に何度も変化する曲に合わせてという課題も含まれている。幸い子どもたちもこれらの曲を気に入ったらしく 多くの子が笑顔で積極的に踊りに参加していた。またその振りも曲想に沿ったものであり それぞれの子どもの個性が出ていて 子どもたちの成長が感じられた。



みんなでカニさんになろう

#### ・さかなつりゲーム



「ワーイ つれた!!」

しむ子もいた。またなかなか釣れない子の中には竿を使わないでひもだけで釣る子や磁石を手で直接魚に押しつけてから釣り上げるなどの苦心をしている姿がみられた。

鉄板を貼った紙製の魚を磁石のついた釣りざおで釣るといったゲームである。単純なゲームであるが 集中力を養い 上手に釣れるよう工夫するといった事をねらいとしている。

この活動も子どもたちの間で好評であり 釣れなくて授業中ずっとこれに取り組む子や休み時間ごとに道具を借りにきて魚釣りを楽

(荒木敏彦)

おいしい秋見つけた 9月～10月

多くの方は「秋」と言えば「紅葉」を思い浮かべ 赤や茶色 黄色 朱色をイメージするであろう。しかしこの時期（9月～10月）はまだ木々が紅葉しておらず 実際に目にすることはできない。したがって子どもたちにとっては赤や茶色とは結びつきにくいのである。ではこの時期はどんな時期かと考えると「食欲の秋」「収穫の秋」なのである。そこで「おいしい秋見つけた」と題して日頃食べている秋の食べ物を題材に様々な活動を展開してはどうかと考えた。幸いにも本校は9月に「ぶどう狩り」10月には「いもほり」を行っており 秋の味覚に触れるチャンスが二度ある。子どもたちが実際に自分で収穫するという体験を生かして「秋」にせまることができればと考えた。ぶどうもさつまいもともに紫色であることからイメージカラーは紫色とした。

活動計画

うた・リズム	ゲーム	造形・その他
<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんぐりころころ 振り付けに合わせて相手を意識して身体表現をする。</li> <li>・虫のこえ 楽器を鳴らしながら虫の道（床に細いロープを置き道に見たててある）の上を歩く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シルエットクイズ 「むらさきのもの ななんだ？」 OHPでスクリーンに映した紫色の物を何であるかあてる</li> <li>・大きないも 「大きなかぶ」の曲に合わせて おじいさんやおばあさんなどになりいもをほる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ぶどう染め ミキサーにかけてしぼったぶどう液で紙や布を染める</li> <li>・いもづくり 紙袋に新聞紙を詰めて先をしぼり着色する</li> <li>・いもぼん さつまいもを切りスタンプのようにおす</li> <li>・さつまいもチップス さつまいもを薄くスライスしてホットプレートで揚げる</li> </ul>

活動のねらいと子どもの様子

○どんぐりころころ

この曲は子どもたちが日頃よく耳にしている曲であり 歌詞の中の「コロコロ」や「ドンブリコ」などのことばが楽しく どんぐりとどじょうのかけあいがおもしろいことから題材として取り上げた。この活動は曲に合わせて身体表現することをねらいとするとともに どんぐり役とどじょう役の振り付けを変えてペアで行なうことで 相手を意識するということもねらいとした。振り付けは完全にできたわけではないが 子どもたちから「○ちゃんになりたい」「私も○○ちゃん」ということばが聞かれた。このことは十分に相手を

意識していたということであり 子ども同士のかかわりを重視するということから考えると成果があったと思われる。

#### ○シルエットクイズ「むらさきのものなあんだ？」

このクイズは5月～6月に「みどりがいっぱい」の単元で行なった「みどりのものなあんだ？」と同じ形式のクイズである。前回同様クイズのルールの定着とことばのかけあいの楽しさを味わうことをねらいとした。以前に経験している活動であるため見通しが持てたようでほとんどの子はスクリーンを見ていた。そしてそれが何であるかを考えて積極的に発言する子が増えてきた。しかし前回のシルエットクイズの記憶があまりにもしっかり残っていたため「このぶどうの色は？」と尋ねると「みどり」と答えがかえってきたこともあった。色を見て答えているのではなく 単なることばのかけあいにとどまった感もあり 今後他の色でもこの活動を試みることによって もっと色に着目できるようになってほしいと考えている。

#### ○ぶどう染め

9月上旬に小学部全員でぶどう狩りに出かけた。そこで そのぶどうを使ってぶどう染めをすることにした。日頃自分たちも食べているぶどうで紙や布を染める楽しさを味わい紫色に染まったことへの驚きを感じることをねらいとした。また紙や布をひもでしばったり 折り方を工夫したりすることで 模様ができる楽しさも同時に味わわせたいと考えた。ぶどう一粒一粒を房から取りミキサーに入れスイッチを入れると液状になるということに



ひとつずついれて

子どもたちはおもしろさを感じたようで どの子も真剣にミキサーを見ていた。紙や布がぶどうのきれいな色に染まり 模様ができているのを見た子どもたちは満足そうであった。

#### ○虫のこえ

この曲には 秋に耳にする虫の鳴き声が「チンチロリン」や「ガチャガチャ」などの楽しい擬声語として数多く入っているため子どもたちの大好きな曲の一つであると言える。トライアングル 鈴を曲に合わせて鳴らすことをねらうとともに 虫の道（床に細いロープを置き道に見たててある）を歩きながら楽器を鳴らすことで 目 手 足などの協応性をも養うことができると考えた。またゆっくりとしたテンポになるとゆっくり歩く 曲が終わったら静かに中央に集まるなどピアノの音を聴き それに合わせて行動できるようになることもねらいとした。虫の道はほとんどの子が意識してその上を歩くことができた。しかしロープを意識しすぎて楽器を鳴らすことを忘れてしまう子が多く 協応性を養うまで

には至らなかった。ピアノの音を聴きそれに合わせた行動をすることは 教師の「そっと」や「ゆっくり」などの声かけも手伝いほぼ達成できた。

#### ○いもづくり

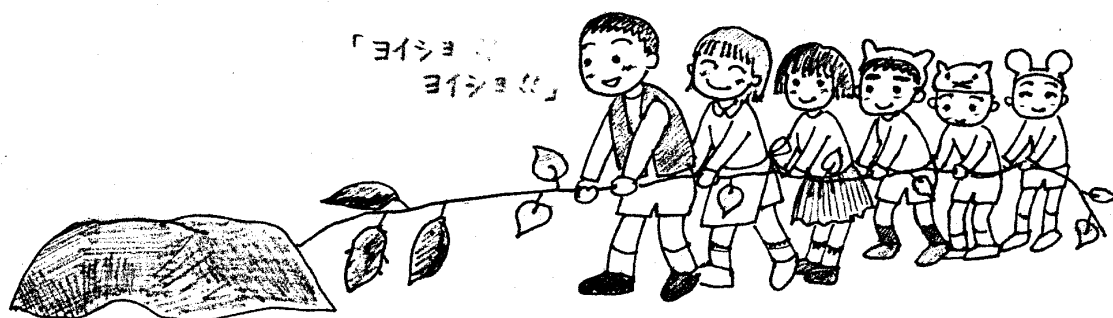
10月下旬に予定されていたいもほりに向けていもづくりに取り組んだ。紙袋に新聞紙を詰めていもの形をつくることとともに 赤と青を混色すると紫になることを知ることをねらいとした。絵の具の配合の仕方がクラスによって違っていたため できあがったさつまいもの色が様々であった。それを見て「あのいも青いよ」と微妙な色の違いに気づいた子もいた。子どもたちは大きないもをハケでダイナミックに着色する活動に楽しそうに取り組んでいた。



「そっと」「ゆっくり」

#### ○大きないも

子どもたちがよく知っている「大きなかぶ」のおはなしのかぶをいもに替えて「大きないも」の活動を行なった。繰り返しが多くストーリーが簡単なこの話を NHKの番組「おかあさんといっしょ」で歌われていた歌を引用してオペレッタ形式にアレンジした。この活動には「いもづくり」で作ったいもを緑のロープにつけて使用した。子どもたちはそれぞれの役を演じることを楽しむとともに ストーリーのおもしろさや6人が協力していもが抜けた時の満足感を味わうことができると考えた。雰囲気を盛り上げるためそれぞれの役に合った簡単な衣装を準備したところ それが気に入ったらしく大喜びで活動に取り組んだ。活動に積極的に参加することが少ない子が このストーリーのおもしろさに気づき ことばのやりとりを楽しみニッコリ笑いながら活動に参加している姿も見られた。



#### ○いもぼん

10月下旬に収穫してきたさつまいもを半分に切り スタンプのように紙に模様をつける活動を行なった。さつまいも自体の断面のおもしろさを味わうとともに 割りばしの先端をけずったもので断面に穴をあけたりひっかいたりしてそれが紙にうつる楽しさも感じる



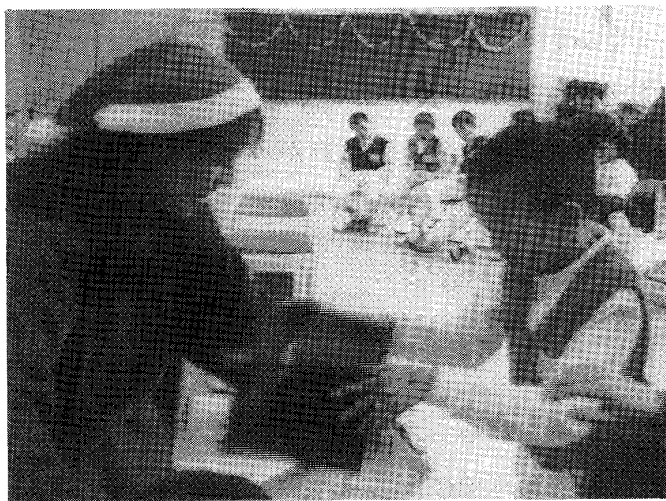
ことをねらいとした。スタンプ台は何色か準備し 紙は個人用の和紙とクラス用の模造紙を準備した。興味を持ってペタペタと押す子や 何色かの色を使う子や 位置を考えながら押す子など積極的に活動に取り組む姿が見られた。作品としての完成度よりその子なりに楽しみ方を見つけて取り組んでいたのが印象的であった。

#### ○さつまいもチップス

収穫してきたさつまいもを調理して食べようと考え 手軽にできるさつまいもチップスづくりに取り組んだ。さつまいもはあらかじめ教師が薄くスライスしておき ホットプレートに油を1cmぐらい入れて揚げることにした。この活動によって自分たちが収穫したさつまいもを自分たちでお菓子にして食べる満足感を味わってほしいと考えた。ホットプレートが出てきただけでほとんどの子はしっかりと前を向いた。またホールにおいしそうなおいが漂ってくると身をのり出してのぞき込む子もいた。できたさつまいもチップスを全員で食べたが 今まで食べたことのない味に興味を示し おかわりして食べる子が何人もいた。

(吉 谷 明)

#### もうすぐクリスマス



「プレゼント、なんだろう」

#### 冬のファンタジー



「ワーイ、ゆきだ。つめたいなあ」

#### (4) 児童の変容

対象児1 A男(1年)

実 態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・排泄 着替えなど大体自分でできるが 次の行動に移るまでに指示を待っているため時間がかかる。</li> <li>・指示がわかり発語もあるが コマーシャルや覚えた歌の歌詞の一部を断片的につぶやいていることが多い。</li> <li>・自分から先生や友達にはたらきかけることが他の子に比べ少ない。</li> <li>・進んで外で遊ぶことは少なく 教室のじゅうたんのところでパンパンと手をたたいたり絵本をぱらぱらめくっていたりする姿が多く見られる。</li> </ul>
ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな集団の中での行動の仕方を理解し 周りの人の動きや表現の仕方をまねることで楽しく参加する</li> <li>・「してみたい」と意思表示して積極的に物事に関わっていく</li> </ul>
経 過 と 考 察	<p>「みどりがいっぱい」の活動では 緑のバトンを振るときにリズムに合わせて楽しそうだった。この頃 連絡帳に次のようなことが書かれていた。「最近 A男の口から『みどり』という言葉が増えたように思います。以前なら信号を見ると『しんごー』とだけ言っていたのに今では『みどり しんごー』と言っています。また山の絵を見た時や高速道路を通っているとき『みどり みどり』と言っています。それに 『♪みどりのー♪』という歌も歌っています。」 これまで 場面や状況に応じた言葉が出てくることのなかったA男。それがお母さんとのドライブの途中 信号や山々をみて「これがみどりなんだ」とわかり 単なるマッチングではなく自分の経験を通してその意味を広げて 学習した事柄と別の場面での事柄をうまく関係づけることができたのである。</p> <p>さらに 「ようこそ龍宮城へ」ではフロアカーで青いビニールの波の下をくぐるときとても嬉しそうですっとその場所から離れようとしなかった。また 最後にドライアイスを使って浦島太郎がおじいさんになる場面を教師が演じたら ドライアイスが入っている箱を「いったい何がはいっているんだろう？」とわざわざ前に出て見に行ったこともあった。このとき見られたA男の様子から 喜びいっぱいの無邪気さや不思議なものを見たときの子どもらしい探求心をうかがい知ることができた。このことは今までただ何となくされるがままに学校・学級での生活を送っていたように思われたA男の心の変化を表している。</p> <p>このように 「部朝の会」のさまざまな活動を通して A男は興味あるものを発見しその活動に進んで参加することによって 感じ方 考え方の幅を拡げそれを行動につなげていった。それは それぞれの活動のほんの一部であるかもしれないが これらのことがまた別の場面で集中力や自発性となって発揮されるであろうと確信している。</p>

(河 合 利 秋)

対象児2 B男（2年）

<p>実 態</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二語文で会話ができるが 「ぼく 食べてるよ」 など現在進行中の話題がほとんどである。</li> <li>・学級集団の中では 教師や友達のすることをよく見ており 関心を示す。</li> <li>・休み時間は ミニカーやゴーカートで遊んだり 砂遊びをしたりしている。友達と遊んでいても 常に教師の支えを求めている。</li> <li>・授業中に当てられたときや大きな集団に参加したときなど 自信を持って行動できず 思わず涙が出てしまうことがある。</li> </ul>
<p>ね ら い</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな集団の中でも 教師や友達のすることをよく見たり聞いたりして活動に参加することができる</li> <li>・大人の支えがなくても 自信を持って行動できる</li> </ul>
<p>経 過 と 考 察</p>	<p>5月末の「みどりをつくろう」の活動中のことである。「やってみたい人！」との教師の問いかけに 手を挙げた子が次々と当てられ みんなの前で青と黄の色水を混ぜていた。みるみるうちに緑に変化していく様子がおもしろかったのか B男もついに手を挙げ みんなの前に出ていったのである。おぼつかない手つきで色水を混ぜるB男だったが その時の表情は何ともうれしそうであった。教師に促されてではなく自分から前に出ていくことは B男にとってどんなに勇気のいることだったであろう。しかし 「僕もやってみよう」という意欲が みんなの前に出ていく勇気を起こさせたのである。この出来事は その後のB男の自信へとつながっていったと思われる。</p> <p>「みどりのものなあんだ？」のシルエットクイズでは 誰よりも早く しかも大きな声で「コップ！」と答えることができ みんなを驚かせた。気持ちをスクリーンに集中させて見つめていただけに見慣れた物の影が現れたときには 思わず答えを叫んだのであろう。自信をつけてきたB男は 大きな集団の中でもしっかり見たり聞いたりできるようになり 自分の力を発揮しはじめたのである。</p> <p>こうして 「ようこそ 龍宮城へ」の頃には B男はすっかり変容し部集団の中でも積極的に活動できるようになっていた。「魚のおどり」では 実にのびのびと自己表現していた。特に良かったのは 教師のまねをしたり自分で工夫したりしながら 曲想に合わせて踊りを変えていた点である。</p> <p>その後「ようこそ 龍宮城へ」は表現会の劇へとつながっていき B男は主役の浦島太郎を演じた。一年生の頃は大きな集団に入ることさえできずに泣いていたB男が 大勢の観客の前で自信を持って演技することができたのである。これは 「部朝の会」で得た自信を そのまま無理なく劇の中で生かしたからであろう。部集団での活動が B男を大きく成長させた一年であった。</p>

(堀井和子)

対象児3 C男(3年)

<p>実 態</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話しことばとしては三語文程度であるが 要求語やコマースルのことばや決まったパターンの中での会話が多く 話を聞いていないことがある。</li> <li>・こだわりが強く 自分の思い通りにならないとパニックに陥ることがある。</li> <li>・色ぬりや粘土などの好きな活動には真剣に取り組むが 全般に活動に対して消極的であり意欲を持って取り組むことは少ない。</li> <li>・ブランコやトランポリンなどダイナミックな遊びが好きである。</li> <li>・あまり慣れていない人や好きではない人とは視線が合いにくい。友達の名前は知っているが 意識しているわけではなく 自分からかかわろうとしない。</li> </ul>
<p>ねらい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はっきりと自分の気持ちを意思表示できる</li> <li>・様々な活動に意欲的に取り組み自分に合った活動を見つける</li> </ul>
<p>経過 と 考 察</p>	<p>教師の「やってみたい人」という問いかけに対して今までほとんど挙手しなかったC男であるが 「部朝の会」を経験していく中で挙手することが増えた。「ようこそ龍宮城へ」の魚つりやフロアカーで波をくぐる活動 「虫のこえ」での楽器を鳴らしながら虫の道を歩く活動には積極的に手を挙げ意欲的に参加していた。また自分が指名されるとすぐ前に出て行き活動に取り組むようになった。</p> <p>また前に出ているメイン指導者や展開されている活動をよく見るようになり シルエットクイズやぶどうをミキサーにかける場面や浦島太郎がおじいさんになる場面など数多くの場面を真剣に見るようになってきた。</p> <p>このようにC男に「聞く力」と「見る力」がだんだんついてきたように思われる。その結果として活動に対しての見通しが持てるようになり積極的に参加する態度が芽生えてきたのではないだろうか。</p> <p>「ようこそ龍宮城へ」で行なった魚つりの活動に興味を持って取り組んだ。この活動の楽しさがわかったのか「部朝の会」が終わってからの休み時間に魚つりを続ける姿が見られた。まさに自分が楽しめる活動を見つけたという感じであった。</p> <p>今までC男が活動に取り組むかどうかは気分によって左右される部分が多かった。しかし見通しが持てるようになり自分の気持ちをコントロールできるようになってきたためパニックに陥ることは少なくなり 立ち直りもはやくなった。</p> <p>このように「部朝の会」で行なった様々な活動に取り組んだことによって C男の世界が広がったように思われる。このことは豊かさにせまるための足がかりとなるものを身につけたということではないだろうか。</p>

(吉 谷 明)

対象児4 D子（3年）

<p>実 態</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダウン氏症候群で発音は多少不明瞭ではあるが 語彙は豊富で三～四語文以上の発話もある。</li> <li>・悪意はないが ものを投げたり 人を叩いたりと乱暴にかかわりがちである。</li> <li>・いろいろなことに興味を持ち 積極的に取り組みたがる。</li> <li>・時として 外界からの刺激を遮断して 手遊び・歌遊びに興じることがある。</li> </ul>
<p>ね ら い</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ものや人に対して優しくかかわる</li> <li>・順番を待つなどの 集団での協調性を身につける</li> </ul>
<p>経 過 と 考 察</p>	<p>教師の手本を見たり 友達の活動を見たりすることができず 自分の番でなくてもすぐに中央に飛び出てくることが多かった。しかし 徐々に他人の活動にも注目できるようになり 「○○ちゃんの次にしてもいい？」などに見通しを持って順番が待てるようになった。</p> <p>この大きな変化が現れたのは 眼鏡をかける習慣が身についてきた頃からである。それまで 他人の活動にはほとんど興味を示さなかったのに 集中して見るようになってきた。これまではよく見えなかったので 興味が持てなかったようである。見えるようになったことから D子の「見る」という情報収集能力が広がったことは特筆すべき点である。</p> <p>そして 大勢の中で 他人の活動を見ることはD子にとって大きな意味があった。5～6月の「みどりのかぜ」の活動の中で 初めは布を乱暴にバサバサとはためかせていたが 曲想に合わせて優しく布を揺らす友達の様子を見たり 教師がそれに対して「○○ちゃん上手に優しくしているね。」というのを聞いたりして 優しく曲に合わせて揺らすようになってきた。</p> <p>6～7月の「さかなのおどり」でも やみくもに踊るのではなく 曲を聴き また 他の子の踊りを見て 工夫するようになっていた。</p> <p>9～10月の「むらさきのものなあんだ？」では スクリーンを食い入るように見つめ 他の子に負けじと 積極的に答えていた。</p> <p>視力が矯正されたことが前提でありながらも 大勢の中で友達の影響を受けながら変化していったD子である。</p>

(西 村 麻 里)

対象児5 E男（5年）

<p>実 態</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音声言語はなく ハンカチをひらひらさせたり 歯で引き裂くなどの感覚遊びに終始しがちである。下を向いて 太ももや腹のあたりを叩いていることも多い。</li> <li>・授業中に着席行動がとれるようになってきた。時々自分の頭を叩いて怒りだすことがある。</li> <li>・音楽を聴くことや体を動かすことが好きで 歌のリズムに合わせて体を揺らす。</li> <li>・休み時間にブランコに乗ったり 高いところに上ったりするのが好きである。</li> <li>・友達とのかかわりは少ないが 同級生のことは友達と認めており抵抗なく手をつなぐ。</li> <li>・日常生活における簡単な内容なら言葉だけでわかる。大人に対しては 自分の要求をしぐさや視線で伝える。</li> </ul>
<p>ね ら い</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな活動を思いきり楽しむ</li> <li>・集団の中で友達を意識し かかわりを持つようにする</li> </ul>
<p>経 過 と 考 察</p>	<p>「みどりのかぜ」の活動では 指名されると前に出てきて 持ち手の筒をしっかり握っていた。音楽を聴いて即座にそれにふさわしい動きをするのは難しかったが 教師と一緒に布をもってリードすると リズムに体の動きが合ってきて楽しく揺らすことができた。E男は最後まで布を放さずに 上下左右に揺れる布の動きを見ていた。</p> <p>「うらしまたろう」のおはなしでは カメに乗った太郎のペープサートが目の前を通る時や 龍宮城の魚のおどりのシーンを教師が演じたときは 嬉しそうに笑いながら見ていた。顔を上げてストーリーに集中している時間もかなり長かった。</p> <p>「おいしい秋みつけた」で 本物のぶどうやさつまいもが出てきたときも E男は前を向いてしっかり教師の話聞いていた。ぶどうを一粒ずつミキサーの中に入れてたり さつまいもをホットプレートにそっとのせたりするのがとても上手だった。</p> <p>「部朝の会」の時間だけでなく 学校生活の他の場面においてもいくつかの変容が見られるようになった。まず ホールのような広い場所でも話し手の方をしっかり見ることができるようになり 注意を向けていられる時間も長くなった。また 興味のある活動に対しては自分からハンカチをポケットにしまって「ぼくもやってみたい」という顔で前出てくるなど 意思をはっきりと示すようになった。さらに 給食の配膳など毎日続けている活動に見通しが持てるようになり 「自分の仕事」だと自覚して行なうようになった。</p> <p>「どんぐりころころ」の歌で3年のR子とペアになって踊るときに 手をつなぐのを嫌がってその子とはしたくないという態度を示した。あまり慣れていない子にはこのように拒否的なところがあるが 別の活動で2年のU男とペアになったときは良い表情で手をつないでいた。自分から友達にかかわっていくことの少ないE男だが「この子は好き」「この子はちょっと苦手」という好き嫌いがあり 日頃の友達の行動をしっかり見ているようである。このようなE男の様子から 友達に対して関心がないわけではなくもっと年下の子ともかかわる機会や みんなと一緒に活動して「楽しいな」と感じる経験を増やしていきたい。</p> <p>これまでは身辺自立や 興味・関心の持てる活動を見つけることを目指して 大人から多くかかわるように努めてきた。しかし 先に述べたE男の成長を見ると 大人とのかかわりだけでなく 友達や年下の子ともかかわりを持てる段階にきていると思われる。子ども同士のかかわり合いの中でもっとE男のよさが出てくることを望まずにはいられない。</p>

(山 野 道 代)

対象児6 F子（6年）

<p>実 態</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話しことばは二語文で 身振り 手振りを交えて大人に話しかける。</li> <li>・大人とのかかわりは多いが友達とのかかわりは比較的少ない。</li> <li>・休み時間はブランコに乗ったり ジャボン玉で遊んでいる。</li> <li>・同じ教室の友達が欠席すると気にして「〇〇おやすみ」と言う。</li> <li>・教師にかかわりを求めるあまり 活動に集中できないことがある。</li> </ul>
<p>ね ら い</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大人とのかかわりよりも友達とのかかわりを拡げる</li> <li>・小さい子にやさしくする気持ちを養う</li> <li>・主体的に楽しく活動に参加する</li> </ul>
<p>経 過 と 考 察</p>	<p>F子は「学級朝の会」の出席調べの時に隣の子が名前を呼ばれて気づかなかったので手をあげるように促していた。</p> <p>また 「部朝の会」で低学年の子どもが前へ出て歌う場面では隣の1年生の子が座っていることに気づき 背中をポンとたたいて前へ出るように促していた。</p> <p>F子は低学年の子の名前を全員覚えている。またF子はまわりの友達の様子をよく見ている。このようにF子は友達を意識する力があるので「部朝の会」のような小学部全員が集まる場でも他のクラスの子を意識していけると思われる。そのため 自分の隣に年下の子がいて教師の指示を聞き逃していると判断した時に促してやらなければならないと考えたようすである。</p> <p>このように F子は自分のクラスだけでなく 他のクラスの子にも少しずつかかわれるようになってきた。</p> <p>一学期はF子は教師に勧められて前へ出て歌やゲームを行っていた。二学期には自分で手を挙げて前へ出てくるようになった。「虫のこえ」の歌の時にトライアングルを鳴らす場面では楽しそうに鳴らしていた。このように F子は活動に楽しく参加できるようになってきた。</p> <p>また この時期のある日の休み時間にブランコにのっていたが 低学年の子がくると譲るやさしさが見られた。</p> <p>F子は 学校生活の流れにのって見通しをもって行動することができ 自分の思いを伝えることもできる。しかし 大人との関わりを求め 上級生という自覚があまりみられないので もっと友だちに関わりお姉さんらしくなってほしいと働きかけてきた。上記のように少しずつではあるが友だちへの関わりが増えていることは評価したい。しかし その関わり方は未熟であり 今後上級生としての自覚を持ってリーダーとしてふるまうようになれることを期待したい。</p>

(新 保 利 久)

#### 4. まとめ

本研究は二年間にわたっているが 一年目はテーマを何にするか 今どんなテーマが求められるのかといったテーマ設定に関するもの また 豊かな心とは何であるか 豊かな生活とは何であるかといった学校生活における豊かさを定義づけるものが主な内容であった。そして具体的に「部朝の会」を通してテーマに迫ってみようとの確認がなされた。

二年目にあたる今年度は 週2時限ある「部朝の会」の年間計画と指導方法に関すること ビデオを通して子どもたちの活動の様子や変容を見ることなどに力を入れてきた。

日々変化する子どもの実態を話し合う中で この子たちにとって「豊かな心と生活」とは何だろうと考えてきたが この二年間の実践研究を通して学んだことや明らかになったこと また課題などをまとめてみようと思う。

イ. 前述したように「豊かな心と生活」についての基本的考え方を「学習活動に意欲的に参加できる子」「心を開いて共感できる子」「自ら考え 工夫できる子」というように三つの観点からみてきた。このように目指す子ども像を共通理解して実践を進めることは指導の手だてを考える上で有効であった。

しかしながら 評価について考えると この観点はいずれも子どもの能動的な心の動きや参加の仕方を重視し 結果ではなく過程を大切にしたものなので 活動の様子をビデオで見るだけでは不十分であった。そこで 実践記録を書きみんなで検討することで補うようにした。このことにより評価の仕方が変わり 活動の再考をせまられたこともあった。

ロ. 研究の方法については 三つのチームを組んで ローテーションしながら進めていったが 一つのチームの展開をみながら 新しい単元の教材を考えたり 作ったりする余裕があり良かったと思う。また メイン指導とサブ指導の役割を替わることにより よりよい指導の仕方を学び合うことができた。メイン指導者が見落としていることでも子どもの近くにいるサブ指導者が つぶやきやこまかい動きをきちんとみており どの活動にどのように参加しているのかを 総合的にみることができた。

子どものとらえ方 活動のねらいなどが教師間で微妙に違っている場合でも メイン指導者とサブ指導者そして記録者がそれぞれの立場から話し合うことにより 子どもを全面的にとらえ 指導のポイントを絞ることができた。

ひとつのテーマのもとグループが独自の単元を設定して 役割を交替しつつ 授業を展開していくというティームティーチングは 今年度 新たに考案されたものであり 今後 もっと吟味していきたい指導法のひとつである。

ハ. 実践については リズム ゲーム活動に加え新たに造形活動を取り上げた。これは みんなで一つの作品を作り上げた経験が 喜びとなり 自分でも試してみよう 自分の



作ったもので遊んでみようという気持ちをもってほしい という願いからであった。休み時間に 完成した「みどりの木」でかくれんぼをしたり 「さつまいも」を引っぱったりして遊ぶ姿がみられ 大人も入って楽しいひとときを持つことができた。

ニ. また 季節を色で強調しながら 年間の活動を組み立てていったことも 今年の研究の大きな特徴であった。季節も色も子どもたちにとって きわめて抽象的であるにもかかわらず 必ずかかわりのあるものである。季節の食べ物や行事に加えて 季節の色を提示していくことにより 生活に一步 豊かさを求めたいと願った。

信号を見て「みどり」と言ったり 自分の着る洋服の色にこだわってみたり クリスマスカンドルの色を自分で選ぶなど 色を意識した横への広がりが見られた。

ホ. 今年の研究では数人の子どもたちを中心に 活動への参加の様子を見ることにした。これは 一人一人の変容に期待すると同時に どのような活動が 子どもたちにとって興味があるのか どのような中で豊かなかかわりを持つことができるのか などについて もっとよく知るためである。

取り上げた子どもたちは 年齢 障害 発達段階などが違う いわゆる「タイプ別」の子どもたちである。一人一人の様子をビデオで見ると 話は聞けないが音楽になるととても喜んでいること 見ていないと思っけていてもちらりと一瞬ではあるが見ていること 隣にいる友達の動きに 思いの外 多く左右されていることなどが分かった。また話し合いの中で 好き 嫌いなど友達同士の微妙な関係も はっきり見えてきた。

子どもたちはみずみずしい感性をもって 一年生は一年生なりに 上級生は上級生なりに部朝の会に集っており 友達や先生とのいろいろな関係の中で その子なりに精一杯の表現をしているのだということが理解できた。

そこで 音楽的な活動を多く取り入れたり シルエットなど照明を暗くして 注目しやすいゲームをしたり 座席替えをするなど 実態にかみあう指導を工夫してきた。

この子らの一見 意味のないように見える動きにも そこには必ずその子なりの理由や意味があることを再認識した。このことについてすべての教師が共通理解を持ち 十分とはいえないが指導に役立てることができたように思う。

今までの集団学習の積み重ねのもと 「部朝の会」を通して「豊かな心と生活」を目指してきた。振り返ってみると 本校の教育目標にある「その子らしさ・全面発達・自己実現」にまさに正面から迫るテーマであり 内容ではなかつただろうか。

子どもらしい豊かな学校生活を どのようにして保障していくか また どのようにして豊かな人間関係を育てていくかについて 今後も話し合いを深め 考えていきたい。

(浦田 節子)